



## 出会い多い社会の功罪

～情報化社会の一断面～

呉大学社会情報学部  
中 北 宏 八

同じ大学にいながら、看護学部の先生方は、名前と顔とが結び付かない方がほとんどだ。年に数回、「親和会」の懇親会と試験監督とで顔を合わせる程度だからである。それが「交流」欄に原稿を書くことになったうえ、新年度からは、看護学部の講義も担当することになった。そこでここでは、「情報化」にからんで日ごろ考えていることの一端を書き、自己紹介として利用させて頂くことにしたい。

原稿を頼まれたのは、たまたま広島空港で、山下洵子先生と出会ったためだった。普通なら、会釈しただけで通り過ぎるところだが、その少し前、入学試験で松山までご一緒したあとだった。立ち止まって話し始めるうち、「私はトラピストなんですよ」。なんとトラップ（罠）を掛けて、捕まえたら放さない人だという。「元新聞記者といっても筆不精が多いんですよ。何を書いても良いというのが特に苦勞で…」などと言っても許してもらえない。結局、前々号の鳥山國士さん<sup>1)</sup>に続く獲物になってしまった。

産業革命のあと、電子・電波技術の発達によって巨大な大衆社会を作り出した現代文明は、インターネットの登場によって「情報革命」と呼ぶべき大きな変革期を迎えている。何しろ「革命」だから、社会制度から人間の価値観まで、全てが変わって当然だが、我々が生活するうえで覚悟して対応する必要があるのは、変化する速度の速さと、情報量の増大だと言えよう。

集積回路の能力が1年半で2倍になるという、インテル社創立者のご託宣「ムーアの法則」はすでに古い。ネットワークの価値は、それにつながっている利用者の数の二乗に比例して上がるという「メトカーフの法則」によって物事が進んでいく時代、犬は1年間で人間の7年分の成長をするという「ドッグイヤー」の変化を覚悟するくらいでは、時代についていけないことになる。しかし所詮、人間には1年間には1年分の成長しか出来ない部分が多い。そこに、情報革命が作り出す変化と多様性に満ちた文明環境と、その中でウロウロせざるを得ない人間という、これまで経験したことのない難問があるのではなかろうか。

やや理屈っぽくなってしまったので、情報化社会の特徴を身近な例で考えよう。昔、伊勢で育った私が進学のため上京したころは、列車に乗れば隣の人と話をするのが普通だった。ところが今では、飛行機に乗っても、隣席の人に声をかけることは滅多にない。山道を歩いていて人と出会えば挨拶を交わすが、都会の雑踏では、見知らぬ人に笑顔を向ければ変な人だと思われかねない。これは「情報革命」以前の、主として交通革命によって人々の活動範囲が広がったことによるものだが、人間は他の人と出会う機会が増えるのに伴って、自然にその接触の仕方を変えて適応してきたことの一例と言えるだろう。

従来型の対面の機会だけでも、その機会を生かすかどうかで人生は左右される。私はかつての記者時代、毎日、何人かには新しい人に会って話を聞くように、と心がけていた。1日に3人に会えば年に1,000人、それだけ未知の世界を知り“特ダネ”にもめぐり会えることになる。今、転身して大学人としての生活を送っているのも、たまたまこうした人脈の一人から声をかけて頂いたのがきっかけだった。

このように、出会いが多ければ人生でいろんなことが経験出来るチャンスが増える。だが、それにはコストがかかるという面がある。かつて家のリフォームをするのに銀行ローンを申し込んだ時、すぐに貸してくれないことがあった。家に来た若い担当者が「お宅は高額の給料が毎月振り込まれるのに、すぐに空になる。サラ金にでも追われているのでは」と面と向かって言ったのである。ちょうど年賀状書きの季節で、その場に800枚の年賀状が積んであった。「これだけの交際があれば給料が少しくらい高くても足りないのは当然でしょう」と言ってやったのだが、交際が多ければ費用だけでなく時間的にも「身が持たない」ことになってしまう。

大学で教え始めた時、社会学の入門教科書を読んでいてある学説に共感した。人間は刺激が少なすぎると退屈するが、多すぎるとストレスになって適応できなくなる、といったことだが、誠にその通りだと思った。人との交際も、自分に合う範囲にうまくコントロールするのが上手な生き方と言えるのだろうが、現代人は種々多様なグループとの付き合いが増えてしまい、忙しくなり過ぎているようだ。

そしてさらに情報化社会である。インターネットやケータイのメールで、様々な人との出会いが、簡単に、しかも家族にも知られず持てるようになった。男女の出会いも、かつては服装や雰囲気などである程度の判別は出来たものの、性別や年齢まで偽った出会いさえもが実現する。典型的なのが、高等裁判所の判事夫人が、ストーカーになってしまった事件だ。これまでなら周囲の人の目を気にして、普通の女性同士の交際相手さえ選別していたであろう閉鎖社会の“奥様”が、メール上の“浮気”をし、三角関係になった女性をメールで脅迫したというのだから、情報化が生み出した新しい人間関係の問題だと言わざるを得ない。

話が学生たちに講義するのがためらわれるところまで近付いてしまったようにも感じるが、そのように思うのも、老人の感覚が現実の変化についていけなくなっているためかもしれない。情報伝達手段の変革が可能にした新しい人間関係が、道徳観、家族関係までを揺り動かしておりながら、新しい社会規範を見つけ出せずにいるのが現実だろう。

「交流」というコラム名のせいで、出会いの考察が中心になったが、情報化によって我々が直面しているのは、政治、経済その他、社会のあらゆる面での激しい変化だ。手元のパソコンで世界中の図書館にも匹敵する情報が簡単に得られる時代、欲望を満たす手段は極めて豊富に、手軽に得られるようになった。情報化が「豊かな人生」の実現に役立つのは確かだろう。だがそれが、「心の平安」にも結び付くのかどうか…。

私は学生時代、「全てを理解することは全てを許すこと」という言葉に強く惹かれた。どんな犯罪も、それが起こされた原因までつきつめて理解すれば、許しの心が生まれる、という考えだ。新聞記者という職業を選んだ動機の一つにも、相互理解を進める仕事が世界の平和に役立つ、と考えたことがあった。イスラエルとパレスチナ、インドとパキスタンのように、隣人ほど憎みあうという現実もあるのだが、北朝鮮とその他世界との対立は、お互いが相手を知らなさすぎるのが大きな問題だと言えよう。前の戦争終結までの日本人衆の多くが「鬼畜米英」と信じ込まされていたような状態だけは、相互理解の促進によって防ぐことが出来よう。情報技術の発達を世界平和の実現に結び付けることは、今や実現可能なもう一つの課題になっている。

話題が広がりすぎたので、話をトラピスト山下先生に戻そう。私もこの原稿執筆を、ちょっとは渋ったものの、いやいやトラピストの餌食になったわけではない。ちょうど申し渡された締切日が新聞休刊日の翌日で、新聞読みに追われずに1日を執筆に当てることが出来たことで、頭の整理にも役立った。何より、この原稿を読んで頂いた方には、私という人間の一端を知ってもらい、看護学部の方々との、顔見知りというだけではない新しい出会いが生まれる可能性がある。交流には時間や労力の負担が必要だが、それが新しいチャンスを生む。講義の準備や採点に追われ「これ以上、忙しくなるのはごめん」という気分でありながら、まだまだ出会いを求めたい記者気質が抜けなかった結果がこの原稿だ。この調子では、刺激の量を適度にコントロールし、ストレスが増えすぎない人生を送れるようになるのは望めそうにないが、多忙さは情報化社会に生きる宿命として楽しむことに心掛けよう。

注

- 1) 鳥山國士：ネーミングは苦勞，楽しみ？，看護学統合研究 3(2)：75-76，2002.